

---

---

桜土手古墳展示館平成 24 年度 秋季特別展  
**秦野の原像-VII 太岳院遺跡**

平成 24 年 10 月 20 日(土)~12 月 2 日(日)



2006-02 地点出土 土偶頭部（縄紋後期 安行 2 式）

## はじめに

秦野盆地内に発達した扇状地形の先端部分の微高地には湧水が多く、その周辺に大規模な縄紋時代の集落が営まれました。

太岳院遺跡もその一つで、その存在は古くから知られており、多くの遺物が採集されています。

秦野駅南部土地区画整理事業に伴う発掘調査では、平成 4 年に市内初となる先土器時代の遺構・遺物も検出

されました。

また、平成 18 年には、太岳院本堂の立替えに先立って発掘調査が行われ、縄紋時代後期の配石墓群や、縄紋時代後期後半から晩期初頭の住居址などが検出され、注目を集めました。

今回の展示では、この調査成果を中心に、縄紋時代の秦野を代表する遺跡の一つである「太岳院遺跡」の姿をご紹介します。

## 遺跡が広く知られるまで



神奈川新聞昭和 32 年 8 月 13 日号

太岳院遺跡の存在は昭和 30 年代はじめから知られており、昭和 32 年の神奈川新聞に、上のような記事が掲載されています。この遺構は、遺跡の名の由来となった古刹、太岳院の住職であった安本利正さんが発見し子どもたちに発掘を体験させたものでした。

2 年後の昭和 34 年には、安本さんをはじめとする秦野郷土文化会の手によって発掘調査が行われ、縄紋時代中期の遺物包含層から「合掌するような形で埋納されたイノシシの掌骨」が検出されました。この骨は、明石原人の発見者として著名な直良信夫の著書にも紹介されています。

しかし、縄紋時代中期のものにしては残りがよく、平沢同明遺跡などでも獣の骨が多く出土するのは縄紋時代

晩期後半に限られています。それも残りやすい歯や、火を受けたものが大半で、このように残りの良い獣の骨の出土は例を見ません。また、写真で確認する限り、この骨が埋まっていた土には植物の微細な根が入りこんでおり、縄紋時代中期の遺物包含層にしては土が硬くしまっていない感が強く、後世の攪乱の可能性があります。



神奈川県秦野市今泉にある太岳院の敷地は、その全域が縄文・土師文化期の遺構になっている。写真は、この遺跡で縄文中期の遺物を伴って発見されたイノシシの指趾骨片である。これを発掘された榊川定春、安本利正両氏の話によると、骨は合掌状に組み立てかけられてあったという。してみると、当河はイノシシの肢端だけを組み合せて祭っていたのかもしれない。(榊川氏提供)

直良信夫 1968『狩猟』法政大学出版局より

この後、昭和 60 年代から平成 9 年にかけて、秦野駅南部土地区画整理事業に伴う発掘調査が断続的に行われ、縄紋時代中期後半から後期前半を主体とする住居址群が検出され、市内有数の縄紋遺跡としての姿が浮かびあがってきました。

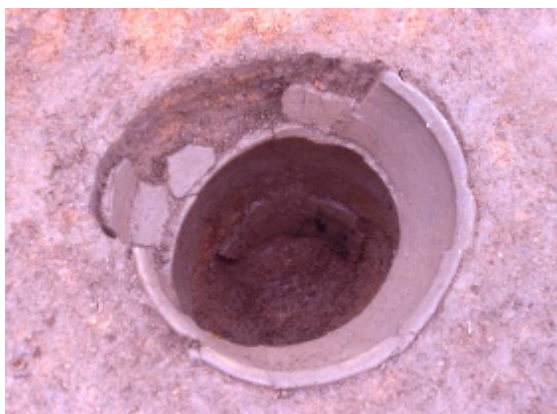
## 平成 18 年の発掘調査

平成 18 年には太岳院の境内から本堂にかけての部分が発掘されまし

た。この境内からは昭和 40 年代に二重の石囲炉が検出され、周辺から県内でも希少な縄紋時代後期後半から晩期前半にかけての遺物が出土していました。

平成 18 年の発掘調査で検出された遺構遺物の時期は、縄紋時代中期後半、後期前～中葉、後期後半～晩期初頭と、大きく 3 つに分けられます。

中期後半の遺構は、竪穴住居址と単独で検出された埋甕が主なものです。秦野駅南部土地区画整理に伴って実施された発掘調査でもこの時期の竪穴住居跡や土壇が多く検出されており、遺跡の範囲内に広く集落が展開していたことを示しています。



13 号住居址埋甕

ただし、平成 18 年の調査地点では他の地点に比してこの時期の遺構遺物が少ない感があります。

後期前葉から中葉にかけての特徴的な遺構は、土壇墓や配石墓で、この地点がこの時期に墓域として使用されていたことがうかがわれます。

これらの墓壇には小型土器が副葬されることがあり、29 号配石墓から

は小型の深鉢、41 号、49 号配石墓からは小型の鉢がそれぞれ出土しています。



配石墓群

また 34 号、35 号、44 号配石墓などでは人骨も検出されており、いずれも頭を東に向けて寝かせてあったことが確認されています。

一部の墓壇は後期後半から晩期初頭にかけて造られたものと想定され、「36b 号配石墓」と名づけられた墓壇からは、ヒスイ製の装身具が検出されています。

後期後半から晩期初頭には、墓域としての性格は薄れ、再び竪穴住居跡が現われます。



12 号住居址

12 号住居址からは、縄紋時代後期終末期の特徴を持つ土器群と晩期初

頭の特徴を持つ土器群がまとまって出土したほか、土偶、人面文土器、手燭形土器なども出土しました。



12号住居址出土遺物

これらの一括遺物は、使用時期にさほどの差もなく廃棄されたものと考えられ、それぞれの土器群相互の関係を考える上での手掛かりとなります。

また、かつて検出されていた上述の二重石囲炉と同様の遺構も検出され、やはり後期末から晩期初頭の土器を少量ながらも伴っていました。

## 縄紋人の顔と装い

平成18年度の調査では、土偶や人面意匠を造形した遺物が比較的多く出土しました。こうした遺物の集中は、何らかの祭祀的行為の痕跡とみられ、それぞれの「顔」の多様性ともあいまって非常に興味深く感じられます。

人面意匠は人体から顔の部分だけ

を概念的に切り離して、粘土の上で再構築することによって描かれます。このことは縄紋人が「顔」という概念を持っていたことを示しています。当然のことながら概念化された対象である「顔」を指す言葉もあったでしょう。

また、かつての採集品中で、鉢に「脚」が付いた土器もあり、「脚」についても同様の事が指摘できるのではないのでしょうか。



耳飾装着を表現した土偶

なお、後期末から晩期初頭の土偶には、耳飾の装着を表現したものが多くみられ、これに呼応するように耳飾の実物も出土しています。



平成18年度調査で出土した耳飾

秦野の原像-VII 太岳院遺跡

発行 平成24年10月20日

編集 秦野市立桜土手古墳展示館

〒259-1304 神奈川県秦野市380-3

Tel. 0463-87-5542

FAX 0463-87-5794